

研究ノート

倉橋由美子作『よもつひらさか往還』と『酔郷譚』における漢詩について

朴 銀 姫

『よもつひらさか往還』における漢詩借用文と原文の比較一覧表

(298—300)

『酔郷譚』における漢詩借用文と原文の比較一覧表 (300—301)

漢詩原文と借用文についての解説 (301—307)

倉橋由美子の晩年の作品『よもつひらさか往還』と

『酔郷譚』における漢詩借用文と、その漢詩の原文と

の比較考察を通して二作品世界の理解を深める。

『よもつひらさか往還』（二〇〇二年）と『醉郷譚』（二〇〇八年）は、倉橋由美子が一九九六年冬から二〇〇四年夏にかけて、雑誌『サントリークオータリー』に連載した、カクテル・ストーリーの短篇シリーズ集である。倉橋の永眠後に出版された『醉郷譚』（短篇7編）は、『よもつひらさか往還』（短篇15編）の続編である。この二作品は蘇軾、于武陵、王安石、白居易、李商隱、陶淵明、楊万里、王維など中国の詩人の詩を借用して、深奥な内容を表現した。

漢詩の引用が目立つようになったのは、一九八九年の作品『交歓』当たりからである。ヒロインの「桂子さん」には「橘石慧」という中国人の友人がいるが、作品の中にはその友人が王維の『竹里館』と『木蘭柴』を中国音で朗読する場面が描かれている。中国語発音の拼音まで記されていることから、倉橋の漢詩研究が如何に本格的なものであるのかを窺うことができる。周知のように、倉橋は初期にはサルトルの実存主義の影響を受けて、その形而上のイメージをカフカやカミュの文体を模倣して、観念的な小説を書いた。一九六七年アメリカ留学から帰国した後、留学先で知り合ったアメリカの女性ヴァージニアをモデルに、写実的な手法で書いた小説『ヴァージニア』を始めとして、一転して現実的な人物・事件を描いた作品を書くようになった。ヴァージニアのようなアメリカの女性を意識して、

古風な日本の女性（または東洋の女性）を描いたのが、『夢の浮橋』（一九七一年）、『城の中の城』（一九八〇年）、『交歓』であり、いわゆる桂子・桂子さんシリーズである。これまで西洋の哲学や文学に親しんできた倉橋の視線は日本、そして東洋へと向けられてゆく。したがって『交歓』における漢詩の借用は、倉橋が日本古典、東洋文学に接近するための重要な方法とも考えられる。それに続いて最晩年の作品である、『よもつひらさか往還』と『醉郷譚』のほとんどの短篇にも漢詩が借用されているが、より深く作品世界を理解するために、また漢詩を借用した作者の意図などについて追及するためには、漢詩の原文について知っておく必要がある。

では、漢詩の原文はどのようなものであつて、作者倉橋はどのように作品のなかで借用したのか、比較してみよう。

『よもつひらさか往還』における漢詩借用文と原文の比較一覧表

作 品 名	引 用 文	漢 詩 原 文
「花の雪散る里」	【引用①】「こんな雪の日にはどこかへ行ってみたいですね（中略）「なるほど。晩雨、ではなくて晩雪人ヲ留メテ酔郷ニ入ラシム、ですか」と慧君はたちまち蘇軾の詩を思い浮かべた。	飲湖上初晴後雨二首 其一 蘇軾 朝曦迎客艷重岡、晩雨留人入醉鄉。 此意自佳君不会、一杯當屬水仙王。
「月の都に帰る」	【引用②】いつかこの日が来ることは覚悟していたと言つてやろうと思ったが、慧君はそれを言うかわりにふざけて、「人生足別離」という言葉を口にした。「于武陵の五言絶句。これがある人が『サヨナラ』ダケガ人生ダと訳している」	勸酒 于武陵 勸君金屈卮、滿酌不須辭。 花發多風雨、人生足別離。
「植物的悪魔の季節」	【引用③】王安石なら「晴日暖風麦氣を生じ……」と詠いそうな初夏の日に逢った少女で、慧君はこの相手を、これも王安石が「緑陰幽草花時に勝る」という通りの若葉の丘に連れ出したのだった。	初夏即事 王安石 石梁茅屋有彎碕、流水瀟瀟度兩陂。 晴日暖風生麥氣、緑陰幽草勝花時。
「雪女恋慕行」	【引用④】天気予報によれば「晩来天雪ふらんと欲す」という空模様だったが、雪は午後早くから降りはじめた。こうして雪のカーテンが下りて仕事のある世界を遮断してしまうと、人びとはにわかに仕事のない別の世界に移転したような気になって、たとえばこのクラブに異界の空気を吸いにくるのかもしれない。	問劉十九 白居易 緑蟻新醅酒、紅泥小火爐。 晩来天欲雪、能飲一杯無。
「緑陰酔生夢」	【引用⑤】慧君は自分の掌を開いてみると、端麗な隸書で「好在」と書いてある。（中略）「よくわかりませんが、サラバということではありませんか。好在、東郊ノ売酒亭……と本当は続くのです。（略）」	砂川飲賦呈山陽先生 江馬細香 好在東郊売酒亭、秋殘疎雨撲簾旌。 市燈未点長堤暗、同傘帰来此際情。

「落陽原に登る」	<p>【引用⑥】「私には好きも嫌いもありません。ただ、昔の詩人が言っていたましたね。『晩<small>くればな</small>に向んとして意<small>こころ</small>適<small>かな</small>わず、車を驅りて古原に登る』と（中略）『で、『夕陽無限に好し、只だ是れ黄昏<small>こうふん</small>に近し』ですかね』</p>	<p>登樂遊原 李商隱 向晚意不適、驅車登古原。 夕陽無限好、只是近黃昏。</p>
「海市遊宴」	<p>【引用⑦】蘇軾は「群仙 出沒す 空明の中 浮世を蕩揺して 万象を生ず」と言ったが、現れた蜃気楼は、最初水とも雲ともつかぬ揺れる気の中に浮遊していた。それはさかんに立ち上がる陽炎に似ている。それはまた、大きな都市の建物のように重なつて聳える無数の樓閣からなるが、どこにある樓閣にも似ていない。木でできているようでもなく、石や鉄でできているようでもない。やがて霧は晴れてその樓閣群の全貌が現れた。</p>	<p>海市詩 蘇軾 東方雲海空復空、群仙出沒空明中。 蕩揺浮世生万象、豈有貝闕藏珠宮。 心知所見皆幻影、敢以耳目煩神工。 歲寒水冷天地閉、為我起鰲鞭魚龍。</p>
「雪洞桃源」	<p>【引用⑧】「また行くこと数十歩、豁然として開朗す」と九鬼さんが朗唱する調子で言ったので、慧君もそれに応じて、「桃花源の記 井びに詩」とつぶやいた。「よくご存じですね。陶潜です」「ということは、その雪洞宮は桃源郷のようなところですか」「まあ、桃源郷でも死者の国でも似たようなものではありませんがね」「また行くと、鶏の声、犬の声が聞こえる……」</p>	<p>桃花源記并詩（抜取） 陶淵明 復前行、欲窮其林。林尽水源、便得一山。 山有小口、髣髴若有光。便捨船、從口入。 初極狹、纔通人。復行数十歩、豁然開朗。 土地平曠、屋舍儼然。有良田美池桑竹之屬。 阡陌交通、雞犬相聞。其中往來種作男 女衣著、悉如外人。</p>
「臨湖亭綺譚」	<p>【引用⑨】「では変な話になるが、湖上に舟を浮かべて、もと長安の倡女だか遊女だかが琵琶を弾いている、ということにしてみよう」（中略）伏せた顔を長い髪が隠している。その顔を上げた時、それが目も鼻も見えない闇黒に塗りつぶされた顔だったらどうしようという恐怖に襲われたが、</p>	<p>琵琶行（抜取） 白居易 忽聞水上琵琶聲、主人忘歸客不発。 尋声暗問彈者誰、琵琶聲停欲語遲。 移船相近邀相見、添酒回燈重開宴。</p>

<p>慧君は氣を取り直すと、エンジン止め、船を漂うのに任せながら、リズムを計って掌で船縁を叩いた。</p> <p>千呼萬喚始出来、猶抱琵琶半遮面。 轉軸撥絃三兩聲、未成曲調先有情。 (中略) 同是天涯淪落人、相逢何必曾相識。</p>	

『醉郷譚』における漢詩引用文と原文の比較一覧表	
「広寒宮の一夜」	<p>【引用⑩】「鵲青の幕に一団氷掛かる。忽然として覺え得たり、今宵の月。楊万里ですが、氣がつくとあそこに月が生じている、といった具合ですね」「そして、元より天に黏ぜずして独自行く、でしょう」と九鬼さんがあとを続けた。</p> <p>八月十二日夜誠齋望月 楊万里 才近中秋月已清、鵲青幕掛一團氷。 忽然覺得今宵月、元不粘天独自行。</p>
「醉郷探訪」	<p>【引用⑪】川岸は低く、その向こうには原野が広がっており、青く霞んで見える山並みはほんの髪の毛一筋、蘇軾が「青山一髪是れ中原」と言ったあの風景だろうか。</p> <p>澄邁駅通潮閣 蘇軾 余生欲老海南村、帝遣巫陽招我魂。 杳杳天低鵲没处、青山一髪是中原。</p>
「玉中交歓」	<p>【引用⑫】いわゆる熱帯夜が続く。慧君はそれをもつてまわった言い方で真希さんにこぼした。「夜熱依然として午熱に同じ。誰かがそんな詩を詠んでいた。夜、窓を開けて寝られるところへ出かけたくなったね。」</p> <p>夏夜追涼 楊万里 夜熱依然午熱同、開門小立月明中。 竹深樹密蟲鳴處、時有微涼不是風。</p>
「玉中交歓」	<p>【引用⑬】「ぼくがつけた名前だけだね」と慧君はわざと自慢げに言った。「王維の別荘は輞湖亭だ。王維は、立派なお客様を迎えて船で湖上の臨湖亭に案内する、という詩も作っている。今回は君がその上客だ」</p> <p>臨湖亭 王維 輕舸迎上客、悠悠湖上来。 当軒对樽酒、四面芙蓉開。</p>
	<p>【引用⑭】「ぼくが勝手につけたんだ。蘇軾の詩を無断借用してね」慧君が「山色空濛雨亦奇」の句を口にしようとする</p> <p>飲湖上初晴後雨其二 蘇軾</p>

と、ほとんど同時に唱和するように、真希さんもそれを口にした。「ああ、山色空濛として雨も亦た奇なり、というあれね。」「君は何でも知っているね」

水光激灑晴方好、山色空濛雨亦奇。
欲把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜。

「酔郷探訪」で陶淵明の詩「連雨独飲」の題名だけを引用したが、これを省く以上およそ十四か所に漢詩の引用がみられる。表はその漢詩原文との対照一覧である。引用文のなかの下線は筆者が引いたものである。

上の一覧表で見取れるように、【引用①】、【引用②】、【引用⑤】、【引用⑩】、【引用⑫】、【引用⑬】、【引用⑭】は、登場人物たちの会話文であり、【引用③】、【引用④】、【引用⑪】は地の文であり、【引用⑥】、【引用⑦】、【引用⑧】、【引用⑨】は物語の原材料となっている。

まず、会話文の引用と原文について考察してみよう。

【引用①】は蘇軾の「飲湖上初晴後雨二首其一」。蘇軾（一〇三六―一一〇一）の字は子瞻で、号は東坡居士。中国ではよく蘇東坡と呼ぶ。眉山（現在の四川省眉山県）の人。宋代の第一の詩人である。22歳に進士に及第して文名一時に上がったが、中年以後は王安石の新法に反対したため、中央から追われて杭州、密州、徐州、湖州などの知事となる。神宗に代わって哲宗が即位すると、一時中央に呼

び戻されるが、晩年にはまた惠州（現在の広東省恵陽州一帯）、瓊州（現在の海南島）などの地に流される。この詩は杭州に通判として赴任した時（36歳？）に、西湖を詠った詩二首の中の一詩である。朝日が客を迎えて打ち重なる山々は美しく、夕べの雨は人を引きとめて酔郷へといざなう。このような西湖の素晴らしい境地を君は悟らないのか、まずは一杯を湖の神にささげよう。という詩である。

作品のなかでは、「大雪の日の夕方」、主人公の慧君が偶然九鬼さんのバーを見つけて、止まり木を前に座って外を眺めると、建物全体が大きな船のようで、果てしなく上昇している錯覚にとらえられ、「今その船は粉雪の舞う闇の海を進んでいるという風」な気分になり、どこかに行きたいと言うと、九鬼さんが「たとえば酔郷ですか」と応じる。そこで蘇軾のこの詩を詠んでみる。蘇軾は雨の中の美しい西湖の風景が人を引きとめて、酔郷へといざなうと詠ったが、慧君は「晩雨」を「晩雪」に換え、雪景色に誘われ、酔郷に行きたい気持ちを表現した。

【引用②】は于武陵^{うぶりやう}の五言絶句「勸酒」。于武陵（八一〇～不明）の名は鄴^{ぎやう}、杜曲（現在陝西省西安南部）の人。

一度進士に及第したことがあったが、官職には就かず各地に放浪した于武陵には、出会いも多ければ別れ也多かっただろう。酒を飲んで別れを告げる時の寂しい心を詠った詩である。この酒杯を君に進める、なみなみとついでこの酒を遠慮してはいけない。花には風雨がつきものである、人生に離別が多い。

作品のなかでは、慧君と付き合っていた桂子さんが突然「月の都に帰る」と告げる。バーで一緒に飲んでいる場面で交わされた会話である。省略された「君に勧む 金屈扨 満酌 辞するを須いず。花発けば風雨多し」の三句もこの場面に相応しい内容である。「人生足別離」を「サヨナラ」ダケガ人生」と訳した人を批判しているが、ここにはこの詩の全内容が関わっていると見てよい。

【引用⑤】は江馬細香^{えまさいこう}（一七八七～一八六一）の38歳の時の詩「砂川飲賦呈山陽先生」。作品に引用された唯一の日本の漢詩人、唯一の女性詩人である。祖父母の友人多保さんを見て江馬細香のことを連想した慧君は、夢の中で江馬細香と結婚生活を送る。夢から覚めてみると、多保さんが「好在」という字を書き残して去ったという話で

ある。慧君は最後に一度多保さんと合い傘をして、雨の中を帰る風景を想像してみる。ここでは京都の東北にある売酒亭以外に、街にはまだ灯は点かず、長い堤は真つ暗闇など、といった風景は引用者によって切り取られている。

【引用⑩】は南宋の楊万里^{ようばんり}の「八月十二日夜誠齋望月」。楊万里（一一二七～一二六〇）の字は廷秀^{ていしやう}、号は誠齋^{せいちやう}野客^{やかく}。吉水（現在江西省吉水県）の人。進士及第して長い間地方官として務めた。一時中央に呼ばれて東宮侍読から宝謨閣学士にまで至ったが、あまりにも誠実な性格のせいで再び地方に転出される。ここで言う八月十二日は旧暦である。中国では楊万里の生きた南宋時代に八月十五日を中秋節と定めたとするのが常識となっている。しかしすでに唐の時代から皇帝が諸臣下や宮女たちを率いて、月神を祭ったり、月を鑑賞しながら詩を吟じたりしていた。君臣の間や友人の間、家族の間の大団円の日である。その日を前にして月を見上げながら吟じた詩である。しかし作品ではこの内容を表す第一句が切り取られている。楊万里の時代の人たちはまだ月が自伝することを知らなかったはずである。この詩で「天」は皇帝、「月」は臣下を象徴する。臣下が君子に従うべきことに、楊万里が忽然異議を訴えている。しかし「広寒宮の一夜」ではそのような意味で引用されて

いない。「独自行く」句から動きものとしての月のイメージを採り、慧君は円盤の形をした月に乗ることを想像した。

【引用⑫】も楊万里の七言絶句「夏夜追涼」。夜になっても昼と同じく熱いので、門を出てしばらく月明かりの下にたたずんでいる。すると、竹がうつそうに生え、樹木が生い茂る当たりで虫が鳴く。風もないのに微かに涼しくなったような気がする。熱帯夜の暑苦しさに耐える詩人の姿が生々しく再現される詩である。

慧君は楊万里の詩から、夜も昼も同じく熱い熱帯夜の季節を表現した第一句だけを抜き出して、含蓄性のある短い文で、猛暑が続く季節であることを生々しく表現した。

【引用⑬】は王維の「臨湖亭」。王維（七一〇～七六二）の字は摩詰。太原（現在山西省）の人。唐の南宗派の山水画始祖でもある。玄宗に仕え累進して給事に至ったが、安禄山の乱の時、賊軍に捕虜され、強迫されて安禄山政権に仕える。それが災いとなり、乱後処罰の対象となったが危うく免れる。晩年には隠棲して仏門に帰依する。篤信の佛教信者であった王維は、世俗の内にあって、隠逸を実践した特異な文人である。山水画のように美しい自然のなかに建てた別荘に、大事な客を舟で迎えてきて、酒盛を始める

ことが大好きだったという。

作品「玉中交歡」では、佛教信者ではないが、入江さんは王維の生き方に学び、「幾重にも重なる山々に圍繞され」、「中国杭州の西湖に劣らず風光明媚」（「臨湖亭綺譚」）である湖の畔に建てられたホテルを買い取り、別荘に改築して、友人を招いて酒を飲み、「伏羲氏以前の人間」、「最初の人間に戻った気分」（「臨湖亭綺譚」）を味わう。慧君は祖父からの生き方を学ぶ。つまり、登場人物たちは王維の詩を引用することに止まらず、王維の生き方も真似ている。

【引用⑭】は蘇軾の「飲湖上初晴後雨二首其二」。古来西湖の優美さを巧みに表現した名詩である。西子は戦国時代の越国の美女西施のこと。

別荘臨湖亭が面している湖の近くに一軒の茶屋があるが、慧君が蘇軾の詩から「雨亦奇」句を採ってきて名前を付けた。蘇軾も佛教や道教思想に通達した文人である。その意味で王維の詩に続いて蘇軾の詩を引用したことには矛盾がない。「山色空濛雨亦奇」句のみ引用されているが、「雨亦奇」句に、「晴方好」句が隠されていると見てよい。西湖を絶世の美人西施の、淡粧の姿と濃抹の姿に喩えた後の二句が省略されているが、慧君と一緒に真希さんが雨中の湖

畔を歩いている風景が、省略されたこの部分を取って代わったと読んでいいだろう。

このように漢詩は登場人物の教養であり、人生の師でもある。【引用⑧】と【引用⑭】のように登場人物たちは、漢詩を「知っている」ことを互いに褒め合っている。つまりここで漢詩は「知」とされている。「知」は「智」に通じる字で、漢詩を知っていることだけではなく、生き方の智慧を持っているという意味も含まれている。

次は、地の文に引用されている漢詩について考察してみよう。

【引用③】は王安石の「初夏即事」。王安石（一〇二一～一〇八六）の字は介甫、号は半山。撫州臨川（現在江西省撫州市）の人。進士に及第して地方官に任じた後、宰相となり種種の新法を起こして幣政の改革を行った。しかし保守派に反対され、晩年には南京に隠栖する。

作品「植物的悪魔の季節」のなかでは、「石梁茅屋彎碕有り、流水濺濺として両陂を渡る」と、自然風景を詠った前二句が切り取られ、新緑の季節を表現する後二句だけを引用して、含蓄性のある表現で、初夏を知らせる香りと、新緑の植物が茂る風景を生々しく表現した。

【引用④】は白居易の「問劉十九」。白居易（七七二～八四六）の字は樂天、号は香山居士。下邳（現在陝西省渭南県）の人。中国ではよく白樂天とも呼ぶ。29歳で進士に及第して、翰林学士、左拾遺に任じられ、その後江州に流されたことがある。晩年は洛陽に閑居した。この詩は江州に在任している時の作品で、雪の降る夕方、仕事を終えて友人劉十九に酒を飲まないかと誘う。真つ赤な火鉢の傍らで泡立つ濁り酒を飲んでいる内容は省略されたが、酒を飲む時の雰囲気があるまま作品に生かされている。「晩来天雪ふらんと欲す」の引用に続く説明は、省略された部分の説明にもなる。

【引用⑩】は蘇軾の「澄邁驛通潮閣」。海南島儋州の流刑地から赦されて、島の北岸の澄邁驛に着いて、通潮閣の上から対岸の雷州半島を望みながら詠んだ詩。「余生老いんと欲す海南島、帝巫陽をして我が魂を招かしむ」と言った前二句の内容は、小説には見られない。今や中国では「青山一発」と四字熟語となつて、「中原」を意味する言葉として用いられる。「青山一発是中原」と引用されたが、実はここに「中原」の意味は抹消され、「青山一発」のイメージだけが生かされている。

このように地の文に引用された漢詩は含蓄に富む言葉で豊かな内容と深い意味を表現する。倉橋は圧縮され濃密な表現力を持つ漢詩を引用することによって、筆墨を無駄にすることなく、短い文章でより豊富な内容を表現した。

最後に、物語の原材料としての漢詩について考察してみよう。

【引用⑥】は李商隱^{りしょういん}「楽遊原」の「楽遊原」から、疑似音の「落陽原」が創り出されたもの。李商隱（八二〇～八五八）の字は義山^{ぎさん}、号は玉谿生^{ぎくけいせい}。懷州河内（現在河南省南沁県）の人。一時涇原節度使王茂元の書記を務めたが、政争の渦に巻き込まれて志を得られなかった。

作品「落陽原に登る」は、慧君が老女九鬼さんと太陽が落ちようとする落陽原に登り、九鬼さんが組み立てた人形の化け物、麻姑少女と楽しく遊んだ後、夕日が沈む頃、九鬼さんが「自刎」して「人生を終える」話である。「楽遊原」は当時の都長安の南にある高原の名である。そこに登れば西から沈もうとする美しい夕陽を眺めることができ、また長安の街並みを俯瞰することができたという。しかし作品の中に出てくる落陽原は、「あたりは枯れ草の平原で、黒々とした木々が木炭画の線のように疎らに立っている。ついさつきまで燃え盛っていた焼け跡の様子を思わせるも

のがある」、死を暗示する高原であった。

【引用⑦】は蘇軾の「海市詩」をもとにした恋物語。蘇軾は一〇八五年に政界に復帰し、登州（現在の蓬萊県）の知事に任ぜられた。登州は蜃気楼がよく現れる地として有名であった。蘇軾がそこに着いた時はすでに冬になっていた。わずか5日間の滞在であったが蜃気楼が見えたのであろう。海神の廟に禱ったところ、蜃気楼が見えたのであるが、本当に見たのではなく、人に聞いた話に基づいて書いた詩である、という説もある。

作品のなかで、従兄妹の舞さんはSと結婚する前に慧君と一緒に見ておきたいものがあつたが、それが蜃気楼であった。二人の頭の中に蘇軾の「海市詩」をもとにした蜃気楼が描かれる。蘇軾は海市蜃楼は「遠くから幻を見ることで成り立つもの」で、実体のないものだとしているが、夢の中で二人はその上に登ることができて、また中に入ることもできた。

【引用⑧】は陶淵明^{とうえんめい}の「桃花源記并詩」をもとに、雪洞の中に作られた桃花源に遊ぶ話。陶淵明（三六五～四二七）の字は元亮。名が潜であるとする説もある。中国ではよく陶潜とも呼ぶ。潯陽柴桑（現在江西省九江県）の人。

曾祖父は晋の大司馬陶侃であるが、陶淵明の代にはすでに家が没落していた。陶淵明は何度か官職についたが、その生活に耐えられず故郷に戻って隠逸生活を送った。

晋の太元中、武陵の人が船に乗って川で魚を捕っているうちに遠くまで流され、桃林に入ってしまった。水源が尽きるところに山が現れたが、山に入る小さな入口があった。そこに光が見えて、船を捨てて入って見ると、やっと人が通るほどの狭い道だった。「また行くこと数十歩、豁然として開朗す」。広々と土地が広がり、家屋が儼然と立ち並ぶ。良田、美池、桑竹の類のあり、鳥の声や犬の声が聞こえた。男女が着ている衣装は外の世界の衣装と同じだが、彼らは外の世界を知らずして、衣食住に困ることなく、幸せに暮らしていた、というのが陶淵明の桃花源である。しかし「雪洞桃源」は、「まぎれもない都会の音があった。見たところ、のどかな田園というよりも、池や樹木の多い都市の風景だった」。建物も派手で、街を歩いている人もどこの国の人だか分らない、人種もいろいろだった。人たちが着ている衣装を見ても、「中国の衣装とも古代ローマの衣装ともつかぬものをまといっている。それがまた重ね着をした状態でなお半透明なもの」だった。彼らはみな死者であった。

【引用⑨】は白居易の「琵琶行」をもとにした恋物語。「琵琶行」は元々長安の名妓だったが、今は「容色が衰え、落ちぶれて江湖の間を渡り歩いている淪落の女」を詠い、今や九江郡の司馬に左遷され、病の床に臥している自分と同じ運命の女に対する同情を表し、不運に堕ちた女を見て、女と同じ運命の自分の身の上を嘆いた。しかし淪落など経験もない、若い慧君はそのような女を知らないのに、「想像できるのはなぜか病み衰えた鬼女のような、怪しくも凄まじい女」だった。

このように漢詩原文は一度解体され、新しい物語と再構築された。その再構築されたものから作者の思想を読み取ることもできる。【引用⑧】がその例である。陶淵明が描いた理想郷は、山の奥にありながら世間と繋がりを持つ世界であり、そこに暮らす人間は世間の人間と同じ服を着ていながら、世間の束縛から解放された、自由な生活を送っていた。官職の生活に耐えられず、隠逸生活を送った陶淵明が道家、佛教の思想に傾倒しながらも、儒家思想を捨てることなく持ち続けていたことを意味する。倉橋が描いた理想郷は、世間と断絶された架空の世界である。しかしそこには現代人が住みなれた都市の風景が見られる。倉橋の現代社会に対する批判であり、近代思想に染められ、そこ

から抜け出すことのできない現代人に対する批判である。

以上で倉橋由美子作『よもつひらさか往還』と『酔郷譚』に借用された漢詩と漢詩原文について考察してみた。倉橋のこの二作品の世界を理解するには、借用された漢詩の原文について理解しておくことが不可欠な条件である。その上、この二作品の世界をより深く理解するためには、文脈に浮かぶ引用文だけではなく、漢詩借用が作品のなかでどのような機能を果たしているのか、漢詩借用自体が意味するものは何か、などについて一層追及する必要がある。

参考文献

- 『中国古典入門叢書 蘇軾―その人と文学』王永照著 山田侑平
訳 日中出版 一九九六
- 『唐詩を読む―杜甫、李白、白居易、王維』新潮社 一九九一
- 『中国古典入門叢書 白居易』陳友琴著 山田侑平訳 日中出版
一九八五
- 『中国古典入門叢書 陶淵明』寥仲安著 山田侑平訳 一九八四
- 『王安石』佐伯富 中央公論 一九九〇、『中国名詩選』(中、
下) 松枝茂夫編 二〇〇一
- 『中国名詩選』(中、下) 松枝茂夫編 二〇〇一
- 『唐詩的解説』叶萌 北京国家図書館出版社 二〇〇九・一
- 『宋詩』房开江 上海古籍出版社 一九九一・一